
或るご主人様とメイドの会話

猫小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或るご主人様とメイドの会話

【Nコード】

N9030I

【作者名】

猫小判

【あらすじ】

ご主人様はメイドの御主人さまでした。メイドはとてもエキセントリックな女性で、いつもご主人様を振り回していました。そんな二人の日常のお話。

（前書き）

……どうか見たことがある？

「ご主人様。気分は如何ですか？」

「お前がそれを聞くか？ 当然最悪だ」

「それはようございました」

「おいっ！ 反省つてものは無いのか、反省は！」

わたくし
「私は反省するようなことなどいたしてはおりませんが」

メイドの格好をした女性は平然とした顔で答える。罪悪感の欠片も無さそうだ。

「お前、寝てる間に勝手に俺を連れ出した上、これからはここが御住まいです、だあ！？ いくら使った？ いくら使ったんだっ！？」

「問題はありません。私がご主人様の資産を運用してあげた利益のみによって建設いたしましたので。そうですね……… 50億は使ったかと」

ぐらり、と青年の上半体が傾いた。すかさずメイドな女性がそれを支える。自然と青年の顔はメイド女のその豊満な胸に埋もれる形になり、

「やんつ。ご主人様のえっちー」

「ニセチチのクセして偉そうなこと言うな」

青年はメイドの頭をはたいて立ち直る。メイドは青年が離れると素早く無表情になる。見事な変わり身だ。

「つまり、お金のことはよろしいということですね？」

「何がつまりだ、何がっ！ 今の文脈をどう取ればそうなる！？」

「分かっております。分かっておりますとも。ご主人様の照れ隠しだと言うことは」

「お前なにも分かってないし！」

「ご主人様もこの屋敷が気に入られたようで安心いたしました。では、屋敷を案内させていただきます。ご安心下さい。設計したのは私ですので迷うことはありません」

「ツツコミどころ多すぎ！ 俺はどっからツツコめばいいんだっ！？」

「ご主人様。そんな初歩的なこともお忘れですか」

メイドは微妙に頬を染めておもむろに口と秘所をおさえた。

「こことここに突っ込めるのですよ？」

「ここで下ネタかよ！ 見た目は良いのに、中身は10年は常温で保管した卵みたいに腐ってるな！！」

「見目麗しいなんてそんな………嬉しいです」

「そこまで言っていないし！ それ以前に褒めてねー！」

「ご主人様が屋敷を気に入ってくださったようで嬉しゅうございます」

「一言もそんなこと言ってないぞ！？」

「……………」

「……………」

青年とメイドは無言で睨み合う。片や眉間にシワを寄せて、片や変わらぬ無表情で。

先に声を上げたのはメイドだった。

「ご主人様のアイコンタクト、確かに読み取りました」

「俺は送っていないぞ！？」

「いいえ。この屋敷を拠点に巨大ハーレムを作りたいという願望が

伝わって来ました」

「それはお前の妄想だっ！」

「安心してください。客間、使用人部屋を合わせて128用意してありますから」

「無駄に多いな！？ てか話噛み合ってねえ！！」

「え…………。ご主人様は私のこと、お嫌いですか？」

メイドは急にしおらしい態度になって、上目遣いで青年に詰め寄る。青年は頬を紅くして頭をかいた。

「そそ、そんなことは、なな無いけど。む、むしろ好きな部類に入る、かな」

「では、ハーレムをつくりましょう！」

「変わり身早っ！？ てかどうしてそれに拘るんだよ？」

「…………。ハーレムをつくりましょう！」

「だからどうして」

「つくりましょう！」

「だからりゅ」

「つくれ」

「命令！？」

一進一退、いや、進みも退きもしない完全なる膠着状態。片や眉間にシワを寄せて、片や無表情。

しばらくの睨み合いの末に、折れたのは青年だった。

「あー分かった。もういい。屋敷の金のことは不問にする。俺はハーレムづくりに励む。…………。これでいいんだろ？」

「理解の早いご主人様で助かります」

「単に押し切られただけだと思うが。というか、ハーレムつくるって言ってるけどどうするんだ？ 金と暴力と権力で連れて来るのか

？」

リアル犯罪者になっちまうからそれは勘弁してくれ、と青年。メイドは青年を安心させるために緩く微笑んだ。

「そんなことする必要はありません。向こうから自然に寄ってきてますから。そのように仕込みました。ついでにプチ整形もさせていたいただきました」

「整形！？ 俺に黙って工事したのか！？」

「工事だなんて大袈裟な。ちよつと二重にただけでございます」
「それならいいや」

青年もあつさりしたものである。メイドさんの教育の賜物だろう。

青年は一つ、大きく息をついた。

「とりあえず部屋に案内してくれ。その後で部屋に使用人達を集める。まずは挨拶をしたい」

「……………はい？ 改めての挨拶など必要ありませんが」

「改めて？ 俺は一度も使用人たちと会ったことは無いように思うんだが」

「目の前に居りますのはメイドでは無い、と？」

メイドは必殺技、潤んだ瞳で上目遣い！ を繰り出した！

効果は抜群だっ！

青年は焦った！

「違うから！ そういうことじゃないからそんな泣きそうな顔するな！ ただ俺は他の使用人に挨拶をだな……………」

「私以外に使用人は居りませんが」

「……………は？ お前、大丈夫か？」

「大丈夫とはどういったことでございましょう?」

「だってお前、この屋敷東京ドーム何個分の敷地面積なんだ?」

「5個分はゆうに越えています!」

「それを一人でか?」

「……………」

「……………」

長い長い沈黙が二人の間を流れた。

「無理です、ご主人様」

「だろうな」

「どうすればよいのでしょうか?」

「二十人くらい雇えばいいだろ」

「……………私のお金は使い切ってしまいました」

青年は軽いため息をついた。

「だと思ったよ。お前、詰めもの辺りでへマするからなあ」

「……………いいです。一人でやりますので」

「強がんなって」

「強がってなどいません」

「……………」

「……………」

二人は睨み合う。片やニヤニヤ、片や眉間にしわを寄せて恨めしそうに。

「二十人くらい俺が雇ってやるよ」

「……………はい?」

「プレゼントを受け取らないのは勿体無いし、俺は掃除が行き届い

ていない家には住みたくなくな

「ありがとうございます。しかし……元はといえばご両親が築き上げてくださった資産なのに、生意気でございますね？」

「や、お前、生意気って」

「私が居なければ1日さえ生き長らえられることもできませんのに」

「そんなバカな。俺はどこぞの長い耳の小動物か」

「そのような可愛げのある生きものであったなら、どれだけよかったことか」

「俺はその言葉をそっくりそのまま返したい気分でいっぱいだが」

「私に可愛げがないとでも！？ それは暴言です！ 訂正を要求します！」

「訂正できるか。お前には可愛気が圧倒的に足りてない」
「がーんっ」

メイドは口で効果音を踏わして、分かりやすく崩れ落ちる。ここでさつと華麗に支えるのが紳士の行動だが、駄目御主人さまは完全に他人事。面白そうにメイドの一人芝居を眺めるだけだ。メイドはしぶしぶ立ち上がる。

「ノッてくれてもよろしいでしょうに」

「日が暮れるわ！」

「……仕方のない御主人様」

「何がだよ！？」

「それは言えません」

「気になるだろ！ 言えよ！」

「……ぽ」

唐突に頬を赤らめるメイドさん。

「ご主人様の、えっち」

「何が!？」

「とりあえずご飯に致しましょう。もう正午はとっくに過ぎてしまいましたし」

そう言い終えぬうちに、メイドは風のように屋敷の中へと消えていった。一人残された青年は大きなため息をつく。

「誰のせいだよ、誰の……てかあいつ、俺の案内忘れてやがるし」

屋敷のどこに何があるのか分からない青年は、もう一度大きなため息を吐きだすのだった。

（後書き）

過去に書いていた執筆中小説に加筆を加えて投稿してみました。
： なんだか最初からあった前半セクションのほうがボケもツツコミ
も鋭い？

感想や評価待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030i/>

或るご主人様とメイドの会話

2010年10月10日05時49分発行